

感覚が知覚する前には何ものをも認識し得ない」という感覚主義をいたるところに展開しており、しかもその感覚がすべての人間に備わっていることを強調している。保育者が既成の科学的知識を完全にもたないでも、幼児教育に関する正しい洞察の可能なことに自信をもつことができるといえよう。

第二にコメニウスの幼児教育論はことばの最も厳密な意味において宗教的・聖書的ということがができる。たとえば、幼児が神に召される存在であることは、幼児らの我に來るを許せ。止むな。神の國は斯くのごとき者の國なり(マルコ福音書十章十四節)まことに汝らに告ぐ。もし汝ら翻へりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ(マタイ福音書十八章三節)という聖書の章句によって証明し、また幼児教育に対するおとなの責任を、我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深処に沈められんかた益なり(マタイ福音書十八章六節)という章句によって基礎づけている。こうした聖書の立場からコメニウスは、

「幼児は神の似姿として等しくその全知という本性を備え、教師が十分の努力を惜しまない限り、あらゆる事物を把握することができ」という幼児に対する絶対の信頼に達し、かかる幼児を健全に育成せしめることを無上の喜び、使命とするいわば幼児に対する教育愛の権化ともみられるものもち得た、幼児の行動を絶え間なく洞察する習性も、このような幼児の正しい成長を宗教的な立場から一心に念ずるコメニウスの考え方の自然の現われともいえるであろう。

以上を要約するならば、われわれはコメニウスから、新しい科学の発達にともない、その成果を利用して、できる限り、科学的な根拠をもって教育効果の昂揚をはかることの必要を考えると共に、①

それによってつくざれない問題が存在すること、②その問題に対する正しくかつ暖い認識と実践とが、常に投げかける教育に関する鋭い感覚によって補われること。③その結果、科学的研究とその利用に対する切実な要求と、解決のための真摯な努力が生れることを学び、④それが幼児を神に最も近い存在とする宗教的な絶対愛を支えられるとき、最も強烈なものとなり得ることを教えられる。

## 仏教保育の在り方

神田寺幼稚園 友松 あきみち

宗教団体の多くが、学校教育、とりわけ基礎としての幼児教育に意を注いできたことは多分に伝道としての目的を含んでいる。仏教立だけでもわが国施設総数の四分の一強を占めている今日、宗教々の当否については充分に考えねばならぬ問題があると思う。

幼児期の生育過程を考慮すれば、幼児に憧憬を与え服従を強いることはできても、信仰を与えることのできぬことに気づく。成人の理解する宗教と、幼児生活の置かれるべき宗教的環境の明白な限界がある。そして、宗派的観念による宗教々の危険がとくにこの点に内在していると云えよう。自分の置かれている仏教保育の立場に限って述べるが、私は、今日行なわれている行事中心や徳目教育についてはいささか疑念を抱いている。仏教の年中行事に参加するこ

とは幼児に祭りとしての楽しみを味わせることはできるのであろう、だが行事から次の行事に引移ってゆく間に有機的なつながりもなく、ある場合には、保育の流れを中断することさえ意味している。

徳目教育が与えようとしているものも成人の理解する情緒道徳であつて、素直に伸びようとする幼児の性情に障害をなしている場合も少なくない。当園では、昭和二十六年より二十九年にわたりに性格検査を施行し教育の成果について調査したことがある（第六回幼児教育研究発表協議会にて発表、山本千枝「園児の性格検査」参照）詳細を述べることをはぶくが保育年限の永いほど宗教的傾向が強く、反面にひ弱さと緻密な思考力の低下しているのが見られた。じ私たちがは正しい生活力の育成が阻害されることをおそれて、儀式行事、日常の規範といった幼児の生活行動を律しがちな形式面をつとめて押え、集団の中で自分から積極的な行動のとれる生活態度を育ててゆく精神的背景をつくり出すことに努めてきた。

すなわち仏教保育においても宗教的な教育理念によって保育計画が立てられ、実際の指導に当りその精神が生かされるならば、今日の幼児教育に望ましい一方向を与えることも可能であろう。基督教の幼児教育に比して仏教保育は諸先輩の努力にかかわらず、教育学としては未だ充分の体系をなしていないが、仏教に内蔵する根本原理が正しい理解によって取上げられるならば、一般教育家に対しても注目すべき指針を含んでいる。仏教保育を行なうに当つて、仏教主義の立場にあるものごとくに対決すべきは、次の二点であると私は考える。

## 一、理想像としての仏（覺者）の問題

### 二、仏教徒の自覚における人間教育

第一の「仏」は仏教保育の場合当然取上げられるべき教育の人格

的目標である。いかんながら今日まで幼児の礼拝時の対象としてのみ与えられていることが多く、生活指導上の頂点に立つ理想像に内在するものとしての教育的考慮が充分に払われていなかった。自分は昨年度の仏教保育大会の前にもこの問題について提起したが、大会に於ては単に「ののさま」「仏さま」という形式的な呼称に対する反省とその統一論が話合れたのみで、社会的存在者としての教師が理解し幼児に受継ぐべきところの仏の内容にまで論究されることなく終つてゐる。だが幼児の生活における精神的支柱となるべき教育目標が今日われわれの置かれてゐる歴史的社会的環境において解明されずに、いつまでも「尊い方」「お悟りをひらかれた方」として抽象化されていることは仏教保育に近代の資質を欠く最大の要因であろう。それと共に保育の場においては仏の概念も幼児に親しみ易く納得され、生活の内側にあるものとして意識されねばなるまい。幼児の上に立つ仏ではなくして、自分にも友人の中にも見出されることころの行為の場を通しての理想像である。偉大な宇宙的存在でもなく、厳しい生活訓練によって到達する距離感も持たず、生命あるがゆえにそこにあるという人間の本質の問題である。これは第二の人間教育にも結びつくことで、かねて釈尊の教団においては身分の上下も職業の貴賤も否定されていた、人間の本質が敬われるのであつて仏教の理の前では國王もまた一個の人間であつた。すなわち人間に価値づけられることは権力的な身分によつてではなく、糞尿処理人ニイチといえども職務に徹することによつて生きがいを見出したように、人の内に仏を見ることができたのである。一般に仏教は人生苦をあきらめと受けとる現実逃避の思想として理解されがちであるが、その根本原理に含むところは生活を打解してゆく躍動する人生の努力が期待されてゐるのである。人種の差別を持たずに

人間の尊厳が仏教ほどに高く評価されている宗教を私は他に知らない。

寺院仏教として引継がれている中には本来の意味を失い、全く習俗化されているものもある。仏教保育の最も望ましい在り方は明日の社会を内包する現代の幸福を仏教の智慧で見究め、仏教徒としての厳しさを持って施設における幼児教育の体制をまず整えることである。集団生活の場では幼児の社会性を育てることが教育上の眼目の一となつているが、人間関係は教師自身の側にこそ考えられねばならぬ課題であろう。社会的存在者としての自我の確立、対人的意識はもとより社会事象に対するわきまえも、人間性の本質をいかに把握するかによつてみずから教育的態度が明白になつてくる。自律を幼児に求める前に、正義に対する積極的な行動力を教師自身が自己の内側に用意しているか、仏教保育の立場からは当然カリキュラム以前の、歴史と社会の歩みに対する今日の教育者としての態度が重要さを加えている。またそのような心構えにおいてこそ生活に対する解釈など、初めて仏教保育としての特色ある教育計画が練られ、人間教育の実践を見ることができるのである。

\*

\*

\*

\*

## 児童相談の諸問題（第一報）

昭和女子大学児童教育研究所

砂田 惠一  
村松 功雄  
斎藤 茂太  
砂田 穰二

当研究所は昨年春より、現在までに取扱つた事例八十例の統計と、クリニックの方針ならびに主な事例の傾向についての中間報告をいたします。

まず相談事例は、男児四十三例、女児三十七例、主に、一・二年の学童ならびに園児であります。

相談理由は、性格行動上の問題四十五%、身体上の問題二十四%、その他就学上・智能発達上・学業上などの問題で、事例によつては、身体上性格上の問題を同時に持つ例もみられました。

事例の内容は、身体上の問題として、虚弱・偏食・脚気症・食欲不振・夜尿・脳炎などがあげられ、性格上の問題としては、情緒不安定、反社会性・意志薄弱・習癖・神経症などが上げられます。

これらの相談に対して、クリニックとしては、まず来談者に対して、問題の概要を明らかにし、母親のパーソナリティーと保育態度を探索し、心理テスト、身体検査、その他の臨床検査を行い、その